

## VUCA の時代を乗り越える日英の智慧

～データの先にあるもの～

さかまき ひろし  
酒巻 弘

一般財団法人日本経済研究所 専務理事

「君たちのクラスに名前がAから始まる子、何人いる？」

すると子供たちがざわつき始め、自分のクラスの友達の顔を思い浮かべながらAから始まる友達の人数を数え始める。すると結構な人数がいる。アーチャー、アリシア、アマンダ、アレーナ、アレックス、ええ～と、それに不思議の国のアリスもお友達だ、……。僕のクラスには10人いるよ、私のクラスは12人よ、と競い合う。

「すごいね。でも君たちのクラス全体の人数が違うかもね。大きなクラスに大勢のAさん、Aくんがいるのは当然だ。じゃあ、何人に一人がAさん、Aくんか考えてみよう……」

そして子供たちがまた競い合う。僕のクラスは4人に1人だ。私のクラスは3人に1人よ。へえ、Aから始まる名前の子って多いんだね。

この会話、新型コロナ対策によりロンドンがロックダウンとなり在宅勤務が続いていたある日の夕方、偶然耳にしたラジオ番組なので詳細までは記憶にない。しかし、数字や統計というものを意識する前に、自分の日頃の学校生活を思い浮かべながら数字や統計の議論に引き込まれていく子供たちの生き生きとしたやりとりは、ロックダウン下の厳しい生活を暫し忘れさせてくれた。

私は2021年6月までの4年間、英国ロンドンで勤務する機会をいただいた。

この4年間で時系列で思い返してみると、日本の殆どの方にとっては既に記憶の彼方かと思うが、まず渡英前後の2017年はイスラム過激派によるテロ事

件が英国でも多発（ロンドン橋付近暴走事件、ウェストミンスター橋暴走事件、マンチェスターでのコンサート会場爆破事件）し、私が普段通勤で使っていた地下鉄ディストリクト線も小型爆破事件により大勢の怪我人を出す事件が起きた（幸い私自身は15分違いで災害を免れた）。そして、これに対して英国社会はむしろ断固結束して落ち着いた対応をしているように感じた。

他方、2016年の国民投票をきっかけにして英国政治だけでなく英国社会を分断する議論になったBrexit（英国のEUからの離脱）は、首相の交代を経て総選挙の末、半数近くの国民の疑問をよそに実行された。総選挙では、現ボリス・ジョンソン首相の「Get Brexit Done」キャンペーンが奏功したといわれている。

このBrexitに伴う経済的・社会的影響の如何・大きさを測る間もなく、世界経済・社会を大きく揺るがすことになる新型コロナウイルスの感染が拡大した。2020年の英国GDPは何と1709年の「Great Frost（大寒波）」以来、まさに300年振りの大幅な落ち込み（▲9.9%）となった<sup>1</sup>。

このように、私にとって初めての英国生活は英国だけでなく世界が劇的に変化する時期（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性、いわゆるVUCAの時代）と重なった。そのため、自分が従来持っている評価の物差しが使えず戸惑っているのが正直なところだが、英国で見聞きし、そして日英の違いについて考えたことを、「データ（統計）と探求心」を

<sup>1</sup> 2021年2月13日付けFinancial Times 他各紙でBOE（英国中央銀行）発表として報道。



#### 【酒巻弘氏のプロフィール】

1982年東京大学経済学部卒業後、日本開発銀行（現・日本政策投資銀行）入行。同行にて主に投資関連業務に携わった後、同行グループ金融子会社の社長および会長。その間、留学、国際機関への出向を含め4回、合計12年間欧米に滞在。また、設備投資研究所主任研究員として社会的共通資本について研究し、著書に東京大学出版会の社会的共通資本シリーズ『都市のルネッサンスを求めて』（共著）。2021年6月より（一財）日本経済研究所専務理事。

テーマにして振り返ってみたい。

## 1. 新型コロナとナイチンゲール

この4年間で経済的にも社会的にも、そしてグローバルに見ても影響の大きかったのが新型コロナだ。2020年の春先に英国においてその新型コロナが猛威を振るい始めて間もなく、英国内のロンドンなどに新型コロナ患者のために臨時に設けられた専用の大型医療施設、「ナイチンゲール・ホスピタル」が出現し話題になった。ロンドンにおいては東部再開発地区ドックランドの大型展示場施設 ExCel London を改装し、2020年4月3日に施設がオープンした。これら大型医療施設名のもととなったのが、同年に生誕200年を迎えたフローレンス・ナイチンゲールである。

日本でも多くの方がご存知の通り、ナイチンゲール



写真1 ナイチンゲール・ホスピタル  
(出所：The main entrance to NHS Nightingale Hospital, London, UK.)

ルはクリミア戦争における野戦病院での活躍が高く評価され、2010年に彼女の没後100年を記念して改修再開されたナイチンゲール博物館（聖トーマス病院敷地内）に彼女の功績の多くが保存されている。当博物館のホームページ<sup>2</sup>には、彼女が「近代看護の創設者」（看護師の職業を専門家として確立させることに貢献）であることに加えて、その功績として統計学（statistical work）、そして証拠に基づいた公衆衛生への貢献（evidence-based approach to healthcare）を挙げている。このことにも表れている通り、彼女の貢献は看護師としての医療現場での活躍だけでなく、むしろ統計などを駆使して広く公衆衛生の重要性を認識させたことにあるようだ。

## 2. 数学的リテラシー

数字や統計といえばサイエンスの先進国のイメージがある英国だが、『OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）～2018年調査国際結果の要約』（文部科学省 国立教育政策研究所、令和元（2019）年12月）の報告を見てみよう。数学的リテラシーの平均得点と世界主要国の中での順位は、日本の527点（世界主要国の中で6位）に対して、英国は近年多少改善傾向にあるものの502点（同18位）に留まる。そして科学的リテラシーは日本の529点（同5位）に対して英国の505点（同14位）に留まり、日本が英国を常時かなり上回っている。ちなみに両リテラシーで世界のトップ5の常連国は中国、台湾、香港、シンガポール、韓国などの東アジア諸国と、フィンランドとエストニアの北欧諸国だ。そのため、英国で

<sup>2</sup> [florence-nightingale.co.uk](https://florence-nightingale.co.uk)

も高等教育におけるSTEM（科学、技術、工学、数学）教育だけでなく、基礎教育における数学的・統計的思考が重視されるようになってきている。そんなこともあってか、冒頭のような番組で子供たちに数字や統計に親しむ機会を増やしているのだろう。

### 3. 新型コロナと統計

2021年6月に日本に帰国した際に多くの方々から「英国の新型コロナの感染は大変でしたね」という優しい言葉をお掛けいただいた。その労りの言葉の背景にはおそらく、2020年末から2021年初の英国での感染ピーク（一日当たりの新規感染者6～7万人）の頃の大変な様子が日本でも連日のように報道されていたこと、そして日本は未だ第五波の医療逼迫状況を経験していなかった、ということもあったと思う。

そんななかで英国の状況に興味を示された方には、ある数字を紹介させていただいた。それは英国における検査件数の多さ、逆にいえば日本における検査件数の少なさである。人口約6,800万人の英国で一日当たり平均約100万件の検査件数があり（2021年6月末現在）、それに対して同時期の一日当たりの新規感染者数は平均約2万5千人だった<sup>3</sup>。同じ頃、日本は人口約1億2,500万人に対して検査件数が一日当たり約10万件、新感染者数は一日当たり約5千人であった<sup>4</sup>。

新規感染者の数だけ見ると確かに英国の新規感染者数は日本の約5倍だが、他方で英国での検査件数は日本の約10倍である。これを人口当たり（日本の

人口は英国の人口の約1.8倍）で比較してみると、英国は日本の18倍以上も検査を実施して、新規感染者が人口当たり9倍となり、一概に英国が酷いとまではいえないかもしれない。むしろ人口当たりで英国の1/18しか検査していない日本では多くの人々が「見えない恐怖」に不安を抱えて暮らしていたのではないだろうか。

新型コロナについては未だわからないことが多いが、新規感染者数という一つの数字だけではなく検査件数、そしてその国の総人口数について確認することにより、数字の持つ印象や場合によっては意味そのものが変わり、その結果人々の行動や対処の仕方も変わってくるかもしれない。感染者数だけで議論することは「私のクラスにはAで始まる名前の子が多いよ！」とだけ言っているのと同じだ。

### 4. 統計に騙されない／統計で騙さないために

ところで冒頭紹介した、偶然に耳にしたラジオ番組で子供たちの相手をしていたのは、英国の経済学者でジャーナリスト、そしてBBCテレビやラジオの人気番組で活躍しているティム・ハーフォードだ。彼が2020年に出版した本<sup>5</sup>からは、もっと多くの人々に数字や統計に親しんで貰いたいという彼の願いを感じる。統計学の有用性を頭越しに説くのではなく、一般の人々が統計に対して感じている不信感を受け止めたうえで、先入観をもって統計を扱うことの怖さについて警鐘を鳴らすことから始めている。そしてそのうえで、数字や統計を扱う心構えについて、統計学だけでなく行動経済学や心理学など

<sup>3</sup> 英国政府 HP「GOV.UK Coronavirus (Covid-19) in the UK」

<sup>4</sup> 厚生労働省 HP「新型コロナウイルス感染症について／国内の発生状況など」

<sup>5</sup> “How to Make the World Add Up: Ten Rules for Thinking Differently About Numbers” Tim Harford, The Bridge Street Press, 2020



人々の行動に与える影響に関する研究成果を踏まえてアドバイスしており、とても参考になる。

特に近代以降サイエンスが発展した英国では「科学的思考方法」や「科学的リテラシー<sup>6</sup>」の考え方には馴染みがあり、そのベースになっているのは「証拠に基づいて結論を導き出す」ための実験データの収集および分析である。その際にはまず、「どのようにしてデータを集めるか」が重要になってくる。というのもデータには、データを扱う人が意図する・しないに拘わらず、偏り（バイアス）が含まれている可能性がある<sup>7</sup>からだ。

このデータのバイアスに伴う問題は、最近のAI（人工知能）の活用でむしろ大きくなり、注目されるようになってきている。ビッグ・データを活用するAIは有用な結論を瞬時かつ効率的に導き出してくれることもある。しかし、データが膨大になるに伴いそのデータにいろいろなバイアスがあるかどうかをチェックすること自体が難しくなり、結果としてむしろ問題がより深刻になっている。統計学の大御所であるデイヴィッド・シュピーゲルハルター（2017～2018年、英国王立統計協会会長）も指摘するところだ。

それでも、「数値は（現実の）ストーリーの全てを語ることはない。……（中略）しかし、数値が語る（現実の）ストーリーは重要だ」（Harford, 2020, P.54、筆者訳）と彼は記す。

そしてハーフォードによるゴールデンルールは以下の3点だ。①何事にも関心を持って臨むこと、②

深く考えてよく観察すること、③疑問をもって質問すること。なぜなら問題は往々にして、精査、透明性、さらに議論の欠如により生じることが多いからだという。

また逆に議論をした結果、議論が白熱して堂々巡りになる場合もある。しかし、お互いが「自分の議論の正しさ」を主張するのではなく、誰にでもわかるように「議論の対象になっている事柄」を説明し、相手の言っていることの本質を理解するよう努めれば、意外にお互いの意見は近いことに気付くことも多い。さすが民主主義発祥の地、英国だと感心しつつ、ふと日本の叡智が頭に浮かんだ。

## 5. 騙し騙されないための心得

それは、昨年2021年に1400回忌を迎えた聖徳太子の『憲法十七条』第一条の冒頭に出てくる「和」の思想である。この日本の叡智について、梅原猛による解釈を引用しよう<sup>8</sup>。

第一条の冒頭にある有名な「和を以て貴しとなす」の解釈に関して、梅原はいろいろな角度からの分析を踏まえたうえで、「つまり太子の和の政治なるものは、けっしていろいろな欲望と意見をもった人の意見を聴き、その中間をとるといような妥協の政治ではないのである。つまり人々の討議のなかで客観的な理を見だし、理によってすべての人を納得させて、国の大事を決めてゆくという政治なのである。」（梅原、1981、P.416）と説明している。

そして、「こういう考え方の根拠には、多数の討議

<sup>6</sup> PISA 調査では「科学的リテラシー」を「自然界および人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」と定義している。

<sup>7</sup> 統計的に正しい調査をするためには、調査対象と考えている母集団と実際に調査を行うために選んだサンプル集団が同じ性質をもっていることが前提になる。しかし調査を正しく行うために適切にサンプルを抽出することは実際には難しく、ランダムに抽出すべきデータがたまたま統計的に適切に選ばれていない「サンプル・エラー」を生じてしまう。さらに、バイアスを持ったサンプル（「サンプル・バイアス」）を使ってアルゴリズムを生成してしまうと、アルゴリズム自体が知らぬ間にバイアスを帯びたものになってしまう。

<sup>8</sup> 『聖徳太子Ⅱ 憲法十七条』梅原猛、小学館、1981年

によってはじめて理が明らかになる、あるいは理が  
 確実にするという考え方があ。これはいわゆるデ  
 モクラシーの基本理念であるが、この時代の絶対君  
 主が、かかるデモクラシーの勧めを行うことは、世  
 界の歴史からみても、まことに異例なことであるよ  
 うに思われる。」(梅原、1981、P.416~417) と評価  
 している。同時に梅原は、大陸から伝来した仏教の  
 影響や既に日本の文化的伝統が存在していたことを  
 踏まえると、この憲法が制定された西暦604年当時  
 の日本には既に民主主義的な考え方が根付いたので  
 はないかと考察している。

いろいろな解釈はあろう。また聖徳太子に関して  
 は歴史上いろいろな評価もあるが、この憲法十七条  
 が存在したことは認められており、日本にも早くか  
 ら「和」の政治や文化が明確に求められてきたこと  
 は確かである。そしてこの、意見を異にする多様な  
 人々が「和」の心をもって集まり、あくまでも「理」  
 を求めて討議を重ね、最終的に多くの人々が納得す  
 る結論に至る、という「ポジティブ思考」は、政治  
 的には民主的プロセスそのものであり、またビジネ  
 スにおいては成長企業に多く見られる傾向だ。

梅原は太子を評して、「いちおう、性悪説のうえ  
 にたっている……しかし、と太子は考える。人間は  
 それほど絶望することはない。……人間には仏性が  
 宿っているのではないか。……人間は必ず善に帰す  
 ことができると考える。」(梅原、1981、P.335) そ  
 の後の日本の政治において太子が求めたようなかた  
 ちでこの民主的プロセスが定着したかどうかは別に  
 して、思想としては、日本は英国よりもかなり早い  
 時期に民主主義の基礎的な考え方を定義し、その実  
 践を追い求めようとしていたことは事実だ。

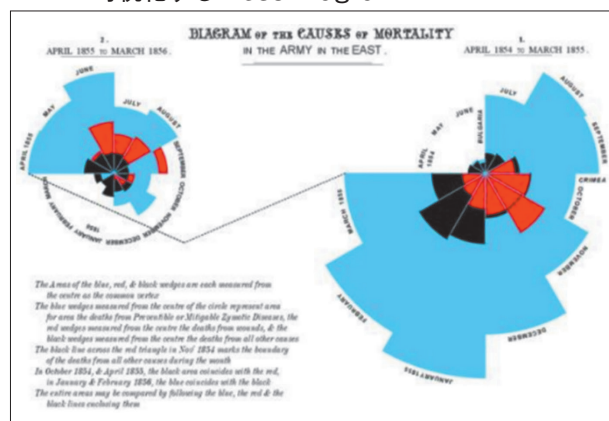
## 6. ナイチンゲールの統計学に対する貢献

ここでもう一度ハーフォードの本に戻ろう。そこ  
 にはナイチンゲールの貢献について詳しく記されて

いる。彼女は、クリミア戦争に従軍した英国陸軍の  
 兵士たちの死亡原因に関して検証した結果、戦場で  
 の負傷による直接的なものよりも、予防可能であつ  
 た感染症などの病気が原因だと考えられるものの方  
 が多かったことを明確にした。さらに、栄養状況や  
 野戦病院での衛生状況を改善することにより院内死  
 亡率が激減したことを説明しようとした。

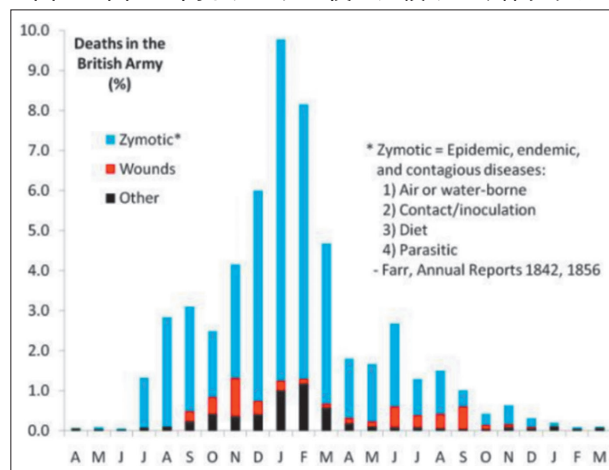
そしてそのことを、単にデータを整理して並べる  
 だけではなく、専門外の人々にも分かり易くするた  
 めに「データの可視化」を行った。それが「Rose  
 Diagram (薔薇のグラフ)」と呼ばれる視覚的なグ

図1 クリミア戦争における戦死者・傷病者の死因を  
 可視化する Rose Diagram



(出典：註9参照)

図2 図1と同じデータを使った積み上げ棒グラフ



(出典：註9参照)

ラフで、一説には世界で初めてのインフォグラフィックだともいわれている（図1及び2<sup>9)</sup>。

彼女は一目見てわかるこの資料を手を政治家や官僚、そして医学関係者たちに論戦を挑んだ。ここからわかることは、データや数値は分析するだけでなく、それらに慣れていない人々にも分かり易いように工夫することが重要であるということだ。

他方、ハーフォードはデータがあれば必ず透明性が確保されるというわけではなく、むしろバイアスのあるデータを目隠しに使うブラックボックス化して説得材料とすること（および、説得されること）に対して注意を促している。大切なのは「和」の心をもって「理」を探求する精神だろう。しかし、そもそもデータを集めない、または集めたデータを公表しない、というのはスタート地点にも立たないと宣言しているようなもので、これでは話にならない。

## 7. 不確実性をどう考え対処するか： 日英の違いと共通するもの

しかし、世の中は必ずしもこういった定量的なもので正確に表現できるわけではない。数字を活用する際にもう一つ考えなければいけない重要なことは、100%正確にはわからないという認識と、その場合の対処の仕方だ。特に留意を要するのは、100%正確にはわからないということから不安を感じる我々の正直な気持ちだ。これはワクチン接種の安全性、そして逆にワクチン接種を受けない場合の感染リスクを自分ごととしてどう受け止めるか、ということと関連してくる。

ここでもう一人の日本の叡智、寺田寅彦を紹介したい。彼は『日本人の自然観<sup>10)</sup>』という随筆の中で「まったく予測し難い地震颱風に鞭打たれつづけている日本人はそれら現象の原因を探求するよりも、それらの災害を軽減し回避する具体的方策の研究にその知恵を傾けたもののように思われる。おそらく日本の自然は西洋流の分析的科学の生まれるためにはあまりに多様であまりに無常であったかもしれないのである。」と述べ、日本の風土のもとに形成された日本人の性向を分析している。

また、この不確実な世界に生きることに关しては、経済学者の猪木武徳<sup>11)</sup>が別の観点から示唆を与えてくれる。猪木は、人類の歴史を振り返って、人間の知識が不完全であるからこそ社会性を持たざるを得なかったと解釈している。不確実性の世界に生きるためには自らの知識の限界を知り、時に他者と切磋琢磨し協力し合いながら、社会性のメリットを存分に発揮することも肝要であろう。さらに、猪木は「問題に対して冷静に（「無私」の立場から）分析の刃を突きつけること、と同時に、その姿勢には他者への「共感」の気持ちが必要ならぬ」（猪木、2021、P.215）とも述べている。英国の代表的な経済学者の一人であるアルフレッド・マーシャルが、1885年にケンブリッジ大学の教授就任講演で経済学を志す者たちに対するメッセージとして述べた“Cool heads but warm hearts”（冷静な頭脳と温かい心）という言葉を用いている。

もう一度新型コロナの話に戻ろう。そうは言っても英国よりも人口が多い日本の方が新型コロナによる死者数は少ないので、国民の衛生・感染予防行動

<sup>9)</sup> 両グラフともに出典は“Florence Nightingale's Hockey Stick The Real Message of her Rose Diagram” by Hugh Small, The Passionate Statistician: Florence Nightingale's use of Statistics and links with statisticians, Royal Statistical Society, London, 7 October 2010.

<sup>10)</sup> 『天災と日本人 寺田寅彦随筆選』寺田寅彦、角川ソフィア文庫、2011年に収録

<sup>11)</sup> 『経済社会の学び方』猪木武徳、中公新書、2021年、P.123



も含めて一国全体の新型コロナ対策としては、日本は英国よりも成功した、といえる。

しかし、この死者数に関して実際にどう集計するかということも問題だ。例えば英国では新型コロナによる死者数は陽性確認後28日以内に死亡した方が発表されており、入院治療後無事退院した数日後に交通事故で亡くなった方も含まれていると批判されたこともあった。また逆にコロナ禍で治療ができず別の病気などで亡くなった方もいた。国民にとって重要なのは、直接的な死亡の原因が何かということよりも、新型コロナに伴う社会的なさまざまな影響により死亡するリスクがどれだけ高まったかということであり、“Excess death”（超過死亡）という統計が注目された<sup>12</sup>。いずれにしても、新型コロナ対策は国民全体の生活および一人ひとりの人生にも関わってくるものであり、究極的には何を重視するのかという価値判断の問題になってくるだろう。つまり、統計は重要だ。だが、何のために統計を集め、どう活用するのか、というそもそもの目的および課題の設定が最も重要だ<sup>13</sup>。

## 8. 結び：「和」の心をもって「理」を 探求する

それぞれの国の中にもいろいろな考え方の人がいる。従って、一国全体を一つの考え方や態度で一般化するのには難しく、また、ある意味で危険でもある。しかし、新型コロナに対する政府や国民の対処の仕方に現れている通り、日英で違いはあり、むしろ日英は同じ先進国でありながらある意味で対極にあるとも感じられた。

世界でもイスラエルに次いでワクチンを積極的に打ち始めた英国、それに対して打ち初めの時期は先進国の中では後れを取った日本。但し、日本はその後猛烈な勢いでワクチン接種のスピードを上げ先進国でもトップクラスの接種率を実現している。英国は、2020年夏に英国版「Go To Eat」である「Eat Out, Help Out」をいち早く始めたかと思いきや、感染が拡大したことや、財政支出の効果が限定的であることなどの議論もあって早々と手仕舞いした。一方日本では、遅れてスタートしたものの、「Go To Eat/Travel」は2020年末近くまで継続された。

失敗する可能性もゼロではないことを前提にいろいろな施策を積極的に実施し、早いタイミングでその検証を行い、問題があればすぐに修正するという、施策のサイクルの速さとアイデアの豊富さに関して、英国は世界でもトップクラスだろう。その根底には、英国にはデータを集め分析し、あくまで世界を数値で理解しようとする「科学的思考」と、その思考を世界に向けて分かり易く表現しようとする「サイエンス・コミュニケーション」を重視する姿勢がある。但し、そのことが、自分は世界の全てを理解していると自らが錯覚してしまい、時には他者から見て尊大な態度を取っていると受け取られることのないよう注意する必要があるだろう。その事例としては2020年の新型コロナ感染が始まった当初、英国の医療アドバイザーが「集団免疫の獲得」（国民の間で感染者が増加して免疫を獲得している割合が一定程度まで高まれば自然に感染は広がらないようになり感染は抑えられる）について言及して批判を浴びたことがあった。

<sup>12</sup> 超過死亡は平年の死亡者数を上回って死亡した人数を推計したもの。日本でも国立感染症研究所が米国疾病予防管理センター（CDC）の手法を用いた超過死亡者数をホームページ上で公表している（2022年1月5日時点のダッシュボードで公表されている2021年1月から9月までの全国の超過死亡数は11,546～68,639人）。

<sup>13</sup>（日経新聞2021年12月3日「経済教室」東京大学 仲田泰祐准教授）「対コロナ、各国の価値観影響」にもある通り、「死者を1人減らすためにどの程度の犠牲を払いたいか」、さらに自殺者などコロナ以外の原因の死者をどう考えるか、という価値観の問題も絡む。単に統計を取るだけでは解答は得られず、価値観の共有が重要。

他方、日本の良さは寺田寅彦にある通り、我々人間が世界の全てについてわかっていると思わず謙虚な姿勢で臨み、一人ひとりができることを忠実に実行するところだろう。但し、その姿勢が、世界の現状や問題の原因を理解することに対する熱意を失わせ、またそもそも理解することを端から諦めてしまうことがないようにしたい。

データについては、その収集や利用などに関してガバナンスやセキュリティーの観点から、その取り扱いに注意を要することは言うまでもない。新型コロナウイルスの感染に関しても未だにわからないことが多々あり、100%確信をもって正解がわからない世の中であることを認識し、それでもなおかつ諦めずにどうしたら世の中や社会を少しでも良くできるのかを考えるためには、データを適切に管理することを前提とし、一方、先を見据えた科学的思考を心掛ける姿勢を大切にすべきである。

そしてそのためには、①意見を異にする多様な人々が「和」の心をもって集まり、あくまでも「理」を求めて討議を重ね、最終的に多くの人々が納得する結論に至る、という民主的プロセスの基本に立ち返る、②子供の頃から統計データを扱う能力だけでなく現実を深く観察して「理」を探求する面白さを教える教育が重要であろう。

そうなるに難しい数学を教えるということに焦点を当てるといっても、自分たちのことや自分たちの周りで起こっていることを、今勉強していることを使って分かり易く理解できるよう教えることが大

切になってくるだろう。さらに言えば、教えるというよりも先生たちも子供たちと一緒に考えていることが大切なのではないだろうか。データってこんなところにも使えるんだという面白さを知り、そして逆にこのデータはちょっと変だな、何でだろう？、と子供たちに思ってもらえたら日本の未来は明るいと思う。

最後に再びナイチンゲールの話に戻りたい。実は、国民的英雄となったナイチンゲールの生涯については謎とされる場所がある。その謎解きの解釈については6. ナイチンゲールの統計学に対する貢献、でグラフを引用したスモールの著書<sup>14</sup>に譲りたいと思うが、そのスモールによれば、ナイチンゲールが1852年に出版した『思索のためのヒント』には「人間の本性は生来善である」と信じていたことが述べられているという。そういえば梅原が解釈する聖徳太子も「人間は必ず善に帰することができる」と考へる」としている。データや統計は、人間がある目的をもって集め、分析し、公表するものである以上、その作業を行う人間の善性を信じていなければむしろ危険ですらある、ということであろう。そういえば、ナイチンゲールも聖徳太子もそれぞれが生まれた国において、一時期ではあるが国民に親しまれる紙幣の肖像として採用された。

言うまでもなく、国の紙幣に求められるものは人々からの「信用」であり、それは二人が最終的に希求した「人間の善性」と無関係ではないだろう。

<sup>14</sup> “Florence Nightingale, Avenging angel” Hugh Small, Constable and Company Limited, 1998 (邦訳『ナイチンゲール 神話と真実』ヒュー・スモール、みすず書房、2003年)